冬木の守護霊と聖杯戦争

武士道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冬木の守護霊と聖杯戦争

【Ｎコード】
Ｎ０１９８Ｙ

【作者名】
武士道

【あらすじ】
みなさんは守護霊と言うものを知っているだろうか？
守護霊とは本来は一人一人の人間に憑いている霊である。
冬木の土地を守る為に再び蘇った守護霊は一体どうするのだろうか？
これはある守護霊の物語・・・・
オリ主は最強にならないようにしますがそういうのが苦手な方は読まないほうがよろしいと思います。

昔話（前書き）

武士道です。
この作品はアニメのＦａｔｅ／Ｚｅｒｏを見て思いついたので書かせて頂きました。
不定期更新ですがよろしくお願いします。
ちなみに自分が連載している作品のいずれかを完結させるつもりです。

昔話

ここは冬木市という所・・・・その町のある公園に一人の老婆とその孫が話していた。

「ねぇ、お婆ちゃん」
「なんだい？」
「あの祠って何なの？」

孫が指差す方向には立派な慰霊碑が立っていた。
老婆はニコリと笑いながら言った。

「あそこはね、この土地の守り神が住んでいる所なんだよ？」
「守り神？」
「そう、この土地をいつも見守ってくれている神様さ」
「へ～、それじゃあ僕の事も守ってくれるかな？」
「もちろん、あれは土地だけじゃなくその土地にいる人達も守ってくれる存在だからねぇ」
「本当？」
「本当さ・・・」
「へへへ・・・」

老婆とその孫は笑いながらその慰霊碑を見た。
その後、老婆は孫に昔話を話し始めた。

――――――――――むかしむかし、ある平和な村に一人の若者が住んでいました。
その若者は武芸に秀でており、頭も大層よかったそうな・・・

周りの人々もあいつは大物になると噂が絶えなかった。
しかし、若者は不治の病に倒れこんでしまった。
それを見た村人は可哀想にと思いながらも、うつらないように若者には近寄らなくなった。
若者の病は血は出ないものの、ただ何ともいえない苦しみが続き、挙句の果てには左腕と右足が動かなくなってしまった。
若者は運命というものを呪い、大好きだった武具を自分の家の庭に埋めた。

ある日、若者が目を覚ますと村が盗賊に襲われていた。
若者は動かない左腕と右足を庇いながらも右腕で武器を取り、傷だらけになりながらも盗賊と戦った。
若者が盗賊をすべて倒して、辺りを見回すとすでに村人は死に絶え、荒廃した故郷が広がっていたそうな・・・
その後の若者はそのまま病で息を引き取ったんだと・・・・

「何か・・・可哀想なお話だね」
「そう、その若者を哀れに思ってあの慰霊碑が建てられたんだよ」
「その人天国で幸せにやってるかなぁ？」
「そうだね。きっとやっているさ」

二人は手を繋ぎながら公園を後にした。
そう遠くない未来にその昔話の男が復活するとも知らずに・・・・

目覚めた守護霊（前書き）

武士道です。
話の流れはオリジナル展開になりそうです。

目覚めた守護霊

『くそ・・・俺は生まれた故郷も守れねぇのかよ』

若者は右手に刀を握り、周りの悲惨な村の惨状を見ながらそう言った。

すると、頭上から雨が降り注いできて家に点いていた火が鎮火されていった。

『何が・・・あいつは大物になるだよ。勝手な事を噂しやがって、俺は何一つ守れやしない・・・』

『畜生・・・この病が無ければ』

若者は動かなくなった自分の左腕と右足を見ながら呟いた。

若者はそのまま体制を崩して、横に倒れた。

『はぁ・・・はぁ・・・限界か？』

若者は体から出ている血を見ながら呟いた。

明らかにこれを見れば、一般人でも死ぬと分かるだろう。それくらいの傷なのだ。

『・・・・たとえ魂になってもこの土地を守ってやる。今度こそ・・・」

そう言って若者は眠った・・・・

冬木市

「いよいよ始まるぞ・・・・聖杯戦争が。」

「・・・・・・」

ここは冬木市、現在は聖杯戦争の舞台となっている土地。
冬木市の教会の中で話しているのは言峰親子。
これからの聖杯戦争の事について話し合っていた。

「・・・・・」

「どうした？アサシン」

「いえ・・・何でもありません」

アサシンは綺麗な月を眺めながらそういった。
しかし、アサシンは嫌な予感がしてたまらなかった。

「・・・・何か嫌な予感がする。杞憂であればよいのだが・・・」

冬木市・・・ある神社

ヒュオォォォォォ

冷たい風と共に目が覚めた若者が居た。
その若者は少し長い黒髪を後ろに束ねて、身軽そうな着物を着た青

年だった。

「ここは・・・・何処だ？」

主人公視点

「ここは・・・何処だ？」

俺が目を覚ますと見知らぬ神社に立っていた。
そして、驚いたのは動かなかった手と足が動いていた事だ。

「俺の病が治っている・・・？」

俺が考えていると、頭にいきなり衝撃が走った。

「ぐっ！！」

俺が膝を抱えて痛みに耐えると、いろんな情報が入ってきた。
ここは、俺のいた時代より遠い未来の事、この土地とこの土地に住む人間が危険だという事。
俺はどうやらこの土地に召喚されたらしい・・・・
しかし、何から守れというのだ？

「それより武器を出すか・・・・」

俺は頭の中で俺の武器の槍と刀を創造して出し武器を確認した。

「よし・・・これで闘える」

俺は武器を消して上を見ると見晴らしが良さそうな高台があったのでそこに向かった。

「それにしても・・・・随分変わったな」

俺は高台へと上り冬木の土地を見晴らしていた。

「・・・・聖杯か」

聖杯・・・それは西洋の神話に出てくる幻の器。
それを、西洋の魔術師とか言う奴らが作りだし、願いを叶えるために七人の魔術師が英雄の霊、つまり英霊を召喚し殺し合う・・・それが聖杯戦争。

そんな事が行われればこの土地も只ではすまないだろう。

「しかし、英雄と言われた奴らと闘えるとは楽しみだ」

俺がそう言っていると、近くの屋敷のような所から少しでかい音が聞こえた。

「早速、お仕事か？」

俺は少し他国の英雄と会うのを楽しみにしながら、音のした屋敷へと向かった。

主人公設定　（前書き）

武士道です。
温かい目で見ていただけると恐縮です。

主人公設定

主人公　　水狩　紫錬　（みずかり　しれん）

人物背景

生前は後に冬木となる土地に住んでいた。生まれは歴代の陰陽師の家系だった。
その頃は武術に優れ、文学についても詳しかった。
後にかかる病が無ければ、英雄とまでは行かなくともそれなりの地位に立てていただろう。
ある程度の武術なら使えるが、特に得意とするのは槍術である。
陰陽道にも通じており、ある程度ならば陰陽道は使える。
生前はとても優しく、西洋で言うなら騎士の鑑のような人物だったのだが、病にかかってから性格が捻くれてしまい蘇った時には、昔の優しさはもう残っていない。
蘇ってからは少し、他国の英雄の力に興味を持っているようだ。

魔術は使えると言ってもほとんどが防御の術であったり、治癒の術であったりする。
攻撃の魔術は指で数えるほどしかない。
魔力が高い理由は土地の霊脈とつながっているため。本来の魔力はＤ

スキル

筋力増加Ｂ＋
耐久Ｃ＋　　本来はＤ
俊敏Ｃ＋

魔力B　　本来はD
運D
対魔力C　　本来はD

固有スキル

武士道A〔武士道を貫いているときや、何かを守るときに筋力増加、俊敏が1ランク上がる〕

土地の守護者A　〔土地を守る守護者の証。冬木の土地にいる間、耐久が大幅に上がる〕

直感B〔あらゆる物を事前に察知するスキル〕

宝具

鎖鬼璃（さきり）
生前主人公が所持していた武器の1つ、宝具化している。
サイズは170cm程度の十文字槍、能力は魔力の吸収と放出。魔力の存在する物に触れればたちまち魔力を吸収する。ただし、生き物は槍を刺さなければ吸えない。
しかも、吸収できる魔力の量は限られてある。
吸った魔力は炎として扱える。ランクはB

獄茨の太刀〔ごくしのたち〕

生前主人公が所持していた武器の1つ、宝具では無いただの名刀。
刀身が怖いほど白く光る太刀。その刀で人を斬っても何故か刀身には血がつかなかったという。

百足弓〔むかでゆみ〕

生前主人公が所持していた武器の１つ、宝具では無く礼装と考えてもらいたい。
昔、主人公が木をはっている百足を射抜いた事からこの名がついた。
矢を自分の魔力で編み出し放つ。連射可能最大二十本まで・・・
主人公が見える範囲でしか使えない。

今のところこんな感じです。
主人公の能力について不満がある人は感想でかいてください。
感想を見ながら改善させて頂きます。

守護霊ＶＳ英雄王（前書き）

武士道です。
設定と矛盾する所が出てくると思いますが、そんな所があったら感想ください。

守護霊VS英雄王

俺は木陰から黒い服を着た男が、屋敷に張られている結界を見事にかわしている所を見ていた。

「あいつは・・・人間じゃないな。俺と同じ様な存在か？」

黒い服を着た男はあれ程複雑な結界を容易くかわしながら、なおかつ破壊していた。
俺はその姿を見ながら感嘆の声をあげた。

「すごいな・・・あれ程の結界、俺じゃあんなに静かに壊すのは不可能だぞ」

黒い服を着て、お面をつけた男は最後の結界の基点に手をかけようとしたその時・・・
男の手を飛んで来た槍が貫いた。

「ぐぁぁあぁあああ！！」
「ほぉ・・・・」

俺がそれを見ていると、屋根から金色の鎧を着た男が立っていた。
金色の鎧を着た男は、黒い服を着た男をゴミを見るような目で見ていた。
そして、金色の鎧を着た男が手をかざすと男の後ろからいろんな武器が出てきた。

「貴様は俺を見るに値はせぬ。死ね――――――――雑種」

男が手を振り下ろすと一斉に後ろの武器が黒い服を着た男に向かって飛んで行った。
ドドドドド！！という音ともに砂煙が起きた。
黒い服を着た男は確実に死んだだろう・・・

「これが・・・・・異国の英雄」

正直、俺は異国の英雄の力を見て感動していた。
俺は・・・こんな奴と闘えるのかと。
そう思っていると、右手が震えた。
決して、恐怖の震えではない・・・・これは――――――――歓喜？

「面白い・・・俺の実力は異国に通じるかな？」

俺はそういって木陰から飛び出し、金色の男に向かって突撃した。

ギルガメッシュ視点

「ふん・・・・つまらん。」

俺はアサシンのいた所を見ると、クレーターが出来ていた。

「まったく、時臣め・・・・こんな事に俺を使うとは・・・」

俺がそう言って、家の中に入ろうとすると後ろから声が聞こえた。

「おい・・・俺と遊ばねぇか？」

「なに・・・・・？」

振り向くとそこには、この国で言う着物を着て胸に鎧を着けた男が立っていた。
男はにやりと笑いながら俺を見ていた。

「誰の許可を得て、俺を見ている・・・雑種！！」

俺は王の財宝（ゲートオブバビロン）で剣を三本程、男に向かって発射した。
しかし、男は慌てる様子も無くただ笑っていた。
そして、三本の剣が当たり砂煙を起こした。

「ふん・・・・・この程度か」

俺は溜め息をつきながら、家に入ろうとした時また声が聞こえた。

「おい・・・・何処に行く？まだ勝負は終わってねぇぞ？」
「・・・何だと？」

振り向くと男は我の出した剣を一本掴んでいた・・・

「貴様ぁ・・・王の財宝に手を触れるか！！」
「あぁ？お前から投げてきたんだろが・・・」
「おのれぇ！！」
俺は再び王の財宝（ゲートオブバビロン）を発射した・・・・

「この程度か・・・・残念だ」

俺は降り注ぐ剣の雨を先ほどの三本の内の二本の剣で弾いていた。
しかし、流石に量が多いな・・・
そう考えていると二本の剣が飛んで来る剣に弾かれた。

「おぉ・・・・・」
「これで、貴様の武器はもう無いぞ!!雑種!!」
「なめるなよ・・・・」

俺はそう言って、鎖鬼璃(さきり)を出した。
そして、剣の雨を弾ききった。

「何ぃ!?」
「今度はこっちの番だぞ!!」
「くっ・・・・」

俺は勢いよく跳んで、金色の男に近づいて槍を振り下ろした。
男は俺の槍を横にかわし、後ろから剣を引き抜いた。

「そらそらそらそら!!」
「くぅ・・・雑種如きがぁ!!」

そう、この鎖鬼璃は触れた物の魔力を吸収する力がある。もっとも、
生き物は刺さなければ意味が無いのだが・・・

「この・・・調子に乗るなよ!!雑種!!」
「おっと」

男も負けじと剣を振ってくる・・・いいねぇ、そうこなくちゃな
俺は男が剣を振ってきたところを槍で弾いた。

「なっ！？」
「そぉら！！」
「ぐぁあぁぁあ！！」

俺が鎖鬼璃で男の腹を思い切り殴った。
男はやられた腹を押さえながら言った。

「きさまぁ！！王たる我に傷をつけるとは許さん・・・絶対に許さんぞぉ！！」
「盛り上がった所で悪いが・・・一旦、お預けだな」
「何だと！？」

俺は懐から煙玉を出して、地面に投げつけると大きい煙幕が張られた。
その隙に俺は離脱した。

理由は1つ・・・いろんな奴らに監視されていたために尽きる。
ここで、派手にやりすぎると他の奴らに警戒されるからな。
俺は最初にいた森に入って、振り向き屋敷を見ながら言った。

「たいした事無いな・・・西洋の英雄とやらも」

守護霊ＶＳ英雄王（後書き）

英雄王のキャラが変ですいません。

守護霊ＶＳセイバー（前書き）

武士道です。
更新頑張ります。

守護霊VSセイバー

ヒュゥゥウゥゥゥと夜の風が俺の顔を撫でた。
夜の風は予想以上に冷たい・・・まぁ、あの時の雨ほどではないが。

「さぁて、結界の基点でも張っとくか・・・・」

俺の使う陰陽術は、そのほとんどが補助系の術である・・・・
やり方といえば単純明快、俺は札に文字を刻む事によってその文字の効果が発動する仕組みだ。
しかし、文字を刻むと言っても『結』と言う文字と組み合わせなければ効果が出ない。
例えば、『結』と言う文字と『防』と言う文字を刻めば防御の結界が完成する。
攻撃の術もあるにはあるが、まず人間にはあまり効かない・・・当然、この戦争にいる英雄達には全然効かないだろう。
まぁ、詳しい話はまた今度にしよう・・・・

俺は結界の基点を張るために移動を開始した。

その頃、ある港のコンテナ置き場にて・・・・

セイバー視点

『令呪を持って命ず・・・・ランサー、バーサーカーを援護しセイバーを討て』

ランサーのマスターの冷徹な声が聞こえたかと思うと、突然ランサーが槍を私に振るってきた。

「く・・・ランサー」
「すまぬ・・・セイバー。貴殿とは正々堂々決着をつけたかったのだが・・・・」

ランサーは槍を構え、バーサーカーと共に襲い掛かってきた。
流石にサーヴァント二人がかりでは私でもきつい。
そして、バーサーカーと剣を打ち合っていると三合目でバーサーカーの能力によって宝具化された武器が私に当たろうとした瞬間、ライダーの奇声と共にライダーの牛車がバーサーカーを吹き飛ばした。

「ランサーのマスターよ、これ以上ランサーの誇りを汚すと言うならばそこのセイバーと共にランサーを潰しにかかるが・・・どうするか？」

『チッ！　ランサー・・・今宵はここまでだ』

「征服王・・・感謝する」

「なぁに、気にするな」

ランサーはライダーにお辞儀をして、消えていった。

「征服王、私からも感謝する」
「なぁに、戦場の花は愛でる性質でな」

互いに笑うとライダーは綱を握り締めた。

「セイバーよ、それではまた会おうぞ！！」

ライダーは再び牛車を動かし、空へと消えていった。

「これが、聖杯戦争なのね・・・セイバー」
「えぇ、どれも難敵です。心してかかりましょう」
「そうね・・・」

私達が帰ろうとした瞬間、突如上から何かが落ちてきた。

「「！？」」

「おや？　どうやら、もう戦は終わったようだな？」

男は現れたと思ったら、周りを見渡したと思うと私達に気付いたのか話しかけてきた。

「あんたら・・・人間じゃないよな？」
「！？　貴様・・・サーヴァントか！？」
「サーヴァント？・・・何だそりゃ？」

こいつ・・・サーヴァントを知らないのか？
と言う事は聖杯戦争関係者ではない？

「ん？あんた・・・」
「・・・何です？」

男は少し顔をぽりぽりと掻くと私を指差しながら言った。

「さっき闘った黄金甲冑と同じ感じがするなぁ。もしかして、聖杯戦争とかの関係者かい？」

黄金甲冑？　もしかして、先程のアーチャーでは・・・？

「セイバー・・・」
「イリヤスフィール？どうしました？」
「あの人・・・人間じゃないわ」
「えぇ、私にもそれは分かります。何せあれ程の殺気、そうそう出せる物はいないでしょうし」
「へぇ・・・俺が人間じゃないって分かるのか？　なら話は早いな・・・」

男は何処から出したのか、十字の槍を構えた。

「あんた・・・強そうだな。　俺も侍だ・・・手合わせ願おう」
「・・・いいだろう」

「セイバー気をつけてね」
「はい！」

私は男の前に立ち、剣を構えた。
ランサーにやられた傷が少し痛むが、やるしかない！！

「いざ参る！！」
「行くぞ！！」

そして、剣と槍が交差した・・・

守護霊ＶＳセイバー（後書き）

ライダーとの会話などが内容が薄くてすいません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0198y/

冬木の守護霊と聖杯戦争

2011年11月29日23時55分発行